

# アメリカ合衆国の州名のアクセント型 に関する一考察\*

## (A Study on Accent Patterns in the Names of States in the United States)

太田 聡

### 1. はじめに

日本語と英語の名詞のアクセント型は、その最も重要な点で、ラテン語アクセント規則 (Latin Accent Rule, 以下では LAR と略す) に従うということがしばしば指摘されてきた (Kubozono (1996), 窪菌・太田 (1998), Kubozono (2008), 太田 (2010) などを参照)<sup>1</sup>。本論は、LAR について簡単に振り返った上で、英語の名詞のアクセントの例として、アメリカ合衆国の州名のアクセント型を取り上げ、その説明にどのように LAR を用いることができるかを具体的に論じる。そして、LAR だけでは処理できない、いわば英語特有のアクセント規則や原則について紹介・検討していく。そしてさらに、一部の例外的なパターンに関する私見も述べることにする。

### 2. ラテン語の分節方法とアクセント規則

#### 2.1. ラテン語の分節法

LAR は音節の長短に基づいて定式化されるので、まずは、ラテン語の語を音節に分ける分節 (syllabi(fi)cation) の方法に触れなくてはならない。ラテン語の分節法は、ラテン語文法入門書・解説書 (例えば松平・国原 (2000)) ではもちろんのこと、ラテン語の辞書 (例えば、水谷編 (2009) など) でも必ず触れられていることであり、以下のようにまとめることができる。

- (1) a. ラテン語の単語においては、語中の母音の数だけ音節がある<sup>2</sup>。  
よって、母音が連続するときは母音の間で区切る。

e.g. pi-us

b. 1個の子音は後ろの母音につく。

e.g. a-mō

c. 2個以上の子音があるときには、最後の子音のみが後ろの母音につくのが普通である。

e.g. mit-tō<sup>3</sup>, ar-bor, sānc-tus

d. ただし閉鎖音（字母では p, t, c, b, d, g）および f + 流音（l, r）の結合は切り離さず、後ろの母音につける。

e.g. tem-plum, cas-tra, Ā-fri-ca

このようにして単語を分節した上で、個々の音節の長短が査定され、アクセントの位置が決定される。

## 2.2. ラテン語アクセント規則について

LAR は実に単純明快でわかりやすく、ラテン語辞典の「はしがき」等でも紹介されるものである。例えば、水谷編（2009）の xi ページには以下のようにある（実例は少し補足した）。ちなみに、アクセントのある長母音は例えば é のように記すのが一般的だが、本稿では ē´ という具合にアクセント記号を右肩につけて表すことにする。

(2) ・2音節語は、常にその最初の音節にアクセントがある。

e.g. mā´-ter, vó-cō, sér-vō

・3音節以上の語は、もし語尾から2番目の音節が長いときは、その音節にアクセントを持ち、もし短いときは、その前の音節、すなわち語尾から3番目の音節にアクセントを持つ。

e.g. vo-cā´-bō, ho-nés-tus, ap-pél-lō; vo-cā´-ve-rit, té-ne-brae, dif-fí-ci-lis

たったこれだけで、ほぼすべての単語のアクセントが機械的に決定されるわけだから、驚きである。なお、注意すべきは、「音節が長いとき」には2種類があるということである。一つは、長母音（上例では /ā/ のように長音記号（macron）を付したもの）もしくは二重母音を含む場合で、このタイプの音節は「本来的に長い（long by nature）」と言われる。そしてもう一つが、母音は短母音であるが、子音が2個以上続く場合で、この音節は「位置によって長い（long by position）」と言われる<sup>4</sup>。

ラテン語では、母音（V と略す）の間に子音（C と略す）が2つあるとき

には、上述のように、基本的に...VC-CV...という分節を行う。よって、位置によって長い音節というのは、子音が2つとも前の音節に組み込まれる必要はない。ここで、(短音記号 (breve) や長音記号といった特殊記号を用いずに、より単純化して、) 短母音は“V”，長母音と二重母音は“VV”と表記することになると、結局、長い音節というのは、以下の (3)に挙げた2通りのどちらかを含んでいればよいことになる。そしてこれらは、(4)に示したいわゆる重音節 (heavy syllable) という概念と同等となる (C<sub>0</sub>は「子音がゼロ個以上」という意味であり、要するに、あってもなくてもよい要素ということになる)。

(3) Long by nature: ...VV  
 Long by position: ...VC

(4) Heavy syllables: C<sub>0</sub>VV, C<sub>0</sub>VC

そしてもちろん、重音節よりももっと長い・重い音節 (超重音節 (superheavy syllable) : C<sub>0</sub>VVC, C<sub>0</sub>VCC, および極重音節 (ultraheavy syllable) : C<sub>0</sub>VVCC, C<sub>0</sub>VCCC) がもし現れれば、それらも、「長い音節」の一種として扱わなくてはならない。結局、長い音節とは、「重音節以上の長さを有する音節」とまとめることができる。そして、逆に、軽音節 (light syllable) と呼ばれる短い音節は、“C<sub>0</sub>V”と表される。

### 3. 英語の名詞のアクセントの基本的な計算方法

#### 3.1. 英語の分節について

「音節」という単位はどのように決まるのか、つまりは、語の音節への分割はどのような基準で行われるのか、といったことを論じた有名なものとしては、Jespersen (1904) の聞こえ度 (sonority) に基づくものがある。音節の中心部分には聞こえ度の高い音が生じ、周辺部に行くにしたがって聞こえ度が下がっていくというものである (Hooper (1976), Selkirk (1984) なども参照)。そしてもう一つの有名な方式が、Kahn (1976) で論じられた最大オンセットの原則 (principle of maximal onset, 以下では Onset Max と略す) ——すなわち、語頭で許される最大の子音結合をオンセットとする——である。本論では、より簡明な Onset Max に従うことにする (なお、聞こえ度に基づく音節論の問題点と、Onset Max の妥当性については、Ohta

(1993) を参照されたい)。

例えば、Boston という都市名は、(1c) のラテン語の分綴法であれば、Bos-ton となる。しかし、stop や star のように、/st/ という子音連続が語頭で許されるので、Onset Max に従えば、Bo-ston と分節することになる<sup>5</sup>。つまり、用いる原則・基準によって結果が異なる。

Onset Max を支持する根拠を1つ挙げれば、例えば、*Longman Dictionary of Contemporary English* (6<sup>th</sup> edition) で mistake という語を引くと、見出し語としては、mis·take という具合に(形態素の切れ目とも一致する)分節が示されているが、発音記号欄を見ると、/mə<sup>1</sup>steɪk/ とある。“1”は第1強勢(primary stress)を持つ音節の前につける記号なので、発音上の分節は、mi-stake と認識されていることが窺える。

ついでながら、呉(1952: 8)には、「母音間に子音が二つ以上あるときは、概ね両方の音節に分属させられる。この際伝統文法では、その子音の組み合わせが、単語の語頭に使用されうる組み合わせであるときは、次の音節の初めにまとめて編入される、という。例 ca-stra 陣営、i-gnis 火、など。しかし事実はそれが、mūta + liquida (例、gr, tl) の組み合わせの外は、前後の母音(に因る音節)に分属せしめられると考うべく、アクセントの法則や詩の格律、その他古碑文における実際の区分法も、これを実証している。即ち cas-tra, ig-nis, …」 とある(下線は筆者による)。下線を施した部分はまさに Onset Max のことである。よって、Onset Max は原則的には妥当であるが、実際の運用では前節の(1)で述べた形が採用されるようになった、ということであろう。

なお、世界の言語を見渡しても、最も一般的で無標な(unmarked)音節構造はCVであり、VCやCVCではない。また、子どもの言語獲得過程においても、(VC型やCVC型の音節も用いる言語を獲得する場合であっても、)まずはCV型のpaやmaなどから使用され始め、VC型やCVC型の音節の使用は遅れる。よって、分節をオンセット基準で行うことは、より基本的な音節構造が並ぶようにすることになろう。

ともあれ、以下では、英語の単語の分節に関してはOnset Maxを採用して議論することにする。

### 3.2. 英語の母音の表示について

よく知られているように、古英語(Old English)や中英語(Middle English)の時代には、英語の母音にも長短の区別があった。しかし、現代英語で

は、母音の区別（ひいては語の意味区別）においては緊張しているか否か（tense か lax か）が重要である。つまり、現代英語では、母音の音量（sound quantity）ではなく、音質（sound quality）の違いを重視している。よって、例えば、日本語の「おじさん」と「おじーさん」、「おばさん」と「おばーさん」のような、同じ母音の音量の違い（1モーラか2モーラか）による意味区別が現代英語では行われない。だからこそ、例えば Kenyon and Knott (1953) では、bee /bi/（/bi:/ではないことに注意）vs. bit /bit/ のように、いわゆる長母音と短母音の区別は、/:/の有無ではなく、異なる音素記号・音声字母を用いてなされた。

しかし、アメリカ構造主義・アメリカ構造言語学（American structuralism/American structural linguistics）の時代には、例えば、bee, bay, buy, boy, do, go, now といった語の母音音素を /iy, ey, ay, oy, uw, ow, aw/ と表示する方式も提案された（Trager and Smith (1951)などを参照）。そして、このいわゆる緊張した母音（tense vowel）の第2要素をわたり音（glide）もしくは半母音（semi-vowel）を用いて表す方式は、生成音韻論（generative phonology）の枠組みでの音節構造の研究においても採用されている（例えば、Selkirk 1982, Ohta 1986などを参照）。そこで、本稿では、英語の二重母音と長母音の両方を含む緊張母音を“V+y/w”と捉え、記号では“VV”と表すことにする（この結果として、緊張母音を含む音節は、ラテン語文法方式で言うところの“long by nature”と同じ扱いをすることになる）。よって、特に基底形・音韻表示（underlying form/phonological representation）を示すときには、例えば、/ai/ や /aɪ/ ではなく /ay/, /ou/ や /oʊ/ ではなく /ow/, といった表記を以下では行う。

### 3.3. 名詞のアクセント配置について

まずは、英語の名詞のアクセントの基本パターンを理解しやすいように、実例を4つのグループに分けて提示する。分節は Onset Max に従っている<sup>6</sup>。

- (5) a. cín-na-mon, cí-ne-ma, a-spá-ra-gus, é-le-phant, A-mé-ri-ca  
 b. ho-rí-zon, a-ré-na, Oc-tó-ber, co-ró-na, hi-á-tus  
    /raɪ/ /riy/ /tow/ /row/ /ey/  
 c. a-gén-da, sy-nóp-sis, a-mál-gam, pla-cén-ta, va-níl-la  
    /dʒen/ /nɔp/ /mæl/ /sen/ /nil/

d. ma-chíne, pa-róle, ca-nóe, ca-réer, ba-záar

/siyn/ /rowl/ /nuw/ /rɪər/ /zahr/<sup>7</sup>

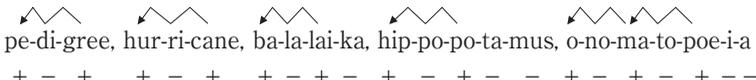
(5a)の例は、語末から2番目の音節が短い(C<sub>0</sub>Vである)ので、語末から3番目の音節に強勢が配置されている。(5b)では、語末から2番目の音節が長い(ラテン語文法式に言えば long by nature のもので、C<sub>0</sub>VV となっている)ので、そこに強勢が置かれている。(5c)では、語末から2番目の音節の母音は短い、子音が後続することで、そこが長い音節と判断される(ラテン語文法式に言えば long by position であり、C<sub>0</sub>VC となっている)。なお、vanilla の場合には、表層形・音声表示 (surface form/phonetic representation) では、もちろん /l/ は1つにしか発音されないが、基底形・音韻表示では、綴り字通り、/l/ が2つあると捉える。このことは、例えば、persimmon, confétti, Madónna などの例が語末から2番目に強勢を持つことから正当化できる。なお、(5d)から、(ラテン語とは違って、)英語では、最終音節の母音が VV と長い場合には (つまり long by nature であれば)、そこに強勢が与えられることがわかる。この(5)に見られる規則を英語強勢規則 (English Stress Rule (以下では ESR と略す)) と呼ぶことにする。

ところで、英語の音声に関する文献の中には、「強勢があればそこ(その音節・母音)は長くなり、強勢がなければ短くなる」といった述べ方をしてるものもある(例えば川越(2007)など)。確かに、強勢のある箇所は母音が弱化するが、強勢のない箇所は母音が曖昧母音 (schwa) に弱化するもので、その結果として、母音・音節の長短が生じる。しかしながら、これでは、強勢の位置が決まらなると母音の音価は決められないと言っているようなものである。この捉え方には反対であり、本論では、日本語も英語も、「長い音節がアクセントを担う」という強い傾向があるという主張をしたい。そして、規則性を確認したい場合には、無意味語 (nonsense word) や臨時語 (nonce word) を使って試してみればよい。例えば、「スヴェルドロフスク」というロシア連邦中央部の州名を覚えているという人は少ないだろうが、日本語として読んでもらえば、「スヴェルドロフスク」というアクセントが与えられるであろう(日本語の語のアクセントの位置、すなわち、ピッチがそこで落ちる位置を、本論ではアポストロフィー (') を付して表す)。しかし、もし「スヴェルドロフスク」という具合に後ろから2番目の音節をわざと長くすれば、そこにアクセントを置き換えて「スヴェルドロフスク」とするはずである。英語でも、例えば、(イタリア

の航海家 Amerigo Vespucci のラテン語名に由来する) America を、仮に Ameroyca, Amerinca と書き換えて、どのようなアクセントになるかを Wayne Lawrence 氏に尋ねてみたところ、(Arizona や Massachusetts などと同じパターンの) Àmeróyca, Àmerínca という回答を得た。つまり、「後ろから数えて2番目の音節が長ければそこに強勢を与える」という計算をしていることが窺えるのである (Ameroyca や Amerinca の第1音節に与えられた副次強勢 (subsidiary stress) については次節で論じる)。

### 3.4. 強勢の補充について

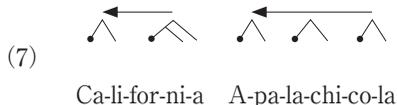
日本語の語のアクセントの特徴の一つは、少々長い語であっても、与えるアクセントは1箇所までよいということである (なお、ピッチが落ちるところがないという意味で「無アクセント (unaccented)」になる語も多くある)。上掲の「スヴェルドロフスク」という地名もそうであるが、例えば、「オーストラロピテクス」のような長い名詞でも、アクセントは1箇所だけでよい。これに対して、英語の多音節語の場合には、次の(6)に例示したように、1語に複数の強勢が与えられる特徴がある。語末・語末から2番目・語末から3番目に与えられた強勢を起点にして、そこから1音節置きに(2つ前の音節に)強勢を転移させている様子を、矢印とプラスとマイナスの記号で表した(+は強勢ありを、マイナスは強勢なしを意図している)。

- (6) 
  
pe-di-gree, hur-ri-cane, ba-la-lai-ka, hip-po-po-ta-mus, o-no-ma-to-poe-i-a
   
+ - + + - + + - + - + - - + - + - + - -

この日英語のアクセント配置の相違は、アクセントを与える範囲の違いとしてパラメータ化することができる。日本語においては、語全体をアクセント付与の範囲として、どこか1箇所にアクセントを配置すればそれで十分なわけだが、英語の場合には、「2音節ないし3音節の範囲の中で先頭・左側を強くする」という強勢配置をしていると言える。よって、例えば(「有界である」ことを表す) [±bounded] というパラメーターを仮定すれば、英語はプラスを選択して、2音節ないし3音節の範囲の中で左側を強くする操作をしているが、日本語はマイナスを選択するので、1語に複数のアクセントを付与することはない、といった説明ができよう (Halle and Vergnaud (1987) の議論も参照)。別のテクニカルな表現をすれば、「英語は語のアクセントの計算において、左が主要部(head)のフット(foot)を構築している」と言うこ

ともできよう。いずれにしても、英語の語においては、起点となる強勢音節 (stressed syllable) の前に2音節以上が残っていれば、強勢を転移させなくてはならない、と一般化できる。この強勢を前方に転移させる規則のことを、Lieberman and Prince 1977などでは強勢後退規則 (stress retraction rule) と呼んでいる。そして、stress retraction はさらに、weak retraction, strong retraction, long retraction に下位分類されている。確かに、例えば、sámíte のように (2音節前ではなく) 1音節前に強勢を転移させる例や、Winnipésaukee, Tâtamagóuchee のように (2音節飛ばして) 3音節前に強勢を転移させる例もある。しかし、標準的なパターンは、強音節と弱音節が1つずつ交替するように、2つ前の音節に強勢を転移させるものである。ところで、この強勢の前方転移を「強勢後退」と呼んでは理解しにくい。この強勢の転移は、リズム交代 (rhythmic alternation) の原則に従うべく、強勢を補充 (supplement) しているのだと解釈し、本論では、Ohta (1986) の強勢補充 (Stress Supplementation (略して SS)) という用語を採用することにする。

フットを樹形図的に表すとすると、ESR の適用の結果、後ろから3番目に強勢がある場合には、そこに3項枝分かれ (ternary branching) のフットが与えられ、後ろから2番目が長くてそこに強勢がある場合には、2項枝分かれ (binary branching) のフットが与えられる。その上で、2項枝分かれのフットを必要に応じて前方へ転移・配置させていく。このプロセスによって、例えば、California や Apalachicola などの地名のアクセント配置も下記のように適切に捉えることができる。仮に、フットの主要部 (すなわち強勢を持つ音節) は黒丸をつけて表した。



California を辞書で見ると、たいてい Cal-i-for-nia と分節されている。しかし、-nia という部分は、最終的な発音 (すなわち、無強勢の箇所を弱体化させた発音) では確かに1音節にまとまるが、基底形では、-ni-a と2音節に分けて捉えるべきである。このことは、例えば、Asia, essential が Asiatic, essentiality となったときに、...sia, ...tial の部分の i と a が分離されて、a に強勢が与えられる (すなわち、別の音節になる) ことなどからも確認できる。よって、California の -for- は語末から3番目とすべきである。

Apalachicola の -co- の部分は (例えば, Coca-Cola を日本語では「コカコーラ」と長母音で発音するが, 英語では /...kow.../ と二重母音になることから推察できるように,) 重音節である。よって, 語末から2番目が長いのでまずはそこに強勢を与え, さらに, その前に4音節あるので2つのフットを配置し, 合計3箇所に強勢のあるパターンが出現するのである。

ちなみに, 英語のフット (強音節と弱音節の組み合わせ) は「2項枝分かれで前側が主要部となるもの」が標準であるということの証拠は, 幼児の発話における省略形などからも得られる。例えば, banana のように弱強弱型の語は, 幼児の発話では nana (もしくは bāna) という強弱型に置き換えられることが知られている (Vihman 1996などを参照)。また, 大人の発話においても, 例えば, イギリス英語のスラングで umbrella が broly となることなどが示唆的である。

このほか, 英語の地名のアクセントにも関与するので, もう一つ別の強勢付与規則にも触れておこう。例えば, banána と bándána を比べた場合, 語末から2番目に強勢がある点は同じだが, bandana の場合には語頭音節にも副次強勢がある点が異なる。この違いは, 第1音節が ba- か ban- か, すなわち, 第1音節が軽音節か重音節か (短い長い) である。よって, ESR (および SS) の適用後に, 語頭に残った音節が重音節であれば, そこにも強勢を与える規則を設けなくてはならない。この規則は, 「第1音節の重音節に強勢を与えよ (Stress the initial heavy syllable)」というものなので, 略して SIHS と呼ぶことにする。この SIHS によって, 例えば, Nevada の第1音節には強勢がないが, Montana の第1音節には副次強勢がある, といった違いを説明できるのだが, より具体的には次々節および第4節で述べることにする。

以上で, 強勢配置の道具立て (基本規則の確認) はできた。もっとも, 1語が複数の強勢を持つ場合, どれが一番強く, どれは2番目もしくは3番目かといった強勢の度合い (の違い) を決める原則も必要である。が, それは次々節で取り上げることにする。

### 3.5. 語末の母音の緊張化について

Chomsky and Halle (1968) は, 次の(8)に挙げたような例の語末の母音が, 強勢を与えられるわけではなくても, 緊張母音となることを指摘している (karate は筆者による追加)。

(8) Ypsilanti, Kikuyu, jujitsu, karate, buffalo, volcano

これを大雑把に言えば、次の母音の表において線よりも上のもの——非低母音 (non-low vowel) ——は緊張化するというわけである。この規則性を“tensing of non-low vowels” (略して TNLV) と呼ぶことにする。

|     |         |   |
|-----|---------|---|
| (9) | i       | u |
|     | e       | o |
|     | æ   a/ɔ |   |

例えば、radio を英語の辞書で見ると、rádiò という具合に語末部分に副次強勢を与えた記述をしているものが多いが、私は、語末の母音が [ou/oo] となるのは TNLV の働きであり、ESR が適用されたわけではないと見なす。そして、radio の強勢は、-di- が短いので、もう1つ前の ra- に与えられ、-o の緊張化は後から起こる (すなわち、強勢配置の後のいわば微調整の結果である) という分析・解釈をしたい。例えば、city や party などの語の語末の綴り字 y に対して、そこに強勢が与えられるわけではないが、/i/ ではなく、/i/ という発音記号が与えられることも、TNLV の反映なのである。この TNLV が関与するアメリカの州名もあるが、具体的な言及は第4節で行うことにする。

### 3.6. 強勢の相対的な強さの計算法

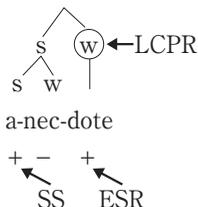
1語の中に複数の強勢が存在すれば、当然ながら、それらの度合い (第1強勢か第2強勢か第3強勢といったこと) も決める必要がある。そのための原則が、Lieberman and Prince (1977) によって提唱された語彙範疇卓立規則 (lexical category prominence rule (LCPR)) であり、以下のように定式化されている。

(10) In the configuration [N1 N2], within a lexical category, N2 is strong iff it branches.

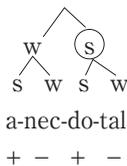
N1とN2というのは、左側の節点 (node) と右側の節点を表しており、(10)の意味するところは、「右側の節点が枝分かれしていれば、そしてその場合にのみ、そちらが強くなる」ということである。

この LCPR を事例に適用してみると以下ようになる (s と w はそれぞれ strong と weak を表す)。

(11) a.



b.



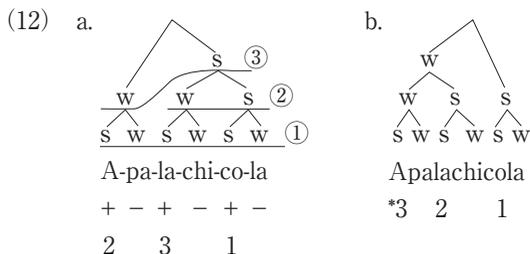
(11a) の anecdote においては、まず語末の -dote に ESR で強勢が与えられ、さらに SS によって語頭の a- にも強勢が与えられる。そして、a-nec- では、強勢のある方がない方よりも強いので [s w] という表示が与えられる。問題は、その1つ上のレベルの s と w の決定であるが、-dote が1音節で枝分かれしない (韻律樹形図 (metrical/prosodic tree diagram) で1本棒の状態である) ので、LCPR に従って丸をつけた部分が w となり、反対に、anec- 側が相対的に s となる。一方、(11b) の anecdotal では、形容詞を作る -al という接尾辞が付加される (が、-al は強勢を持たない) ため -dotal の部分が [s w] となる。そして、この場合には「丸をつけた部分である」右側が枝分かれする状態なので、そちらが s となる。

この「右側が枝分かれすればそちらが強い」という LCPR は、表面に現れる事実をただ述べているだけのように見えるかもしれないが、実は、英語の語の歴史を反映した大原則という面があるのかもしれない。英語は、元々ゲルマン系の言語であり、本来語は1音節や2音節の短いものが圧倒的に多い。よって、強勢の位置は固定されているようなものであった (2音節語であれば、「接頭辞+語幹」から成る語などでなければ、とりあえず前を強く読めばよい)。しかし、1066年のノルマン征服 (Norman Conquest) 以降、おびただしい数のフランス語が英語に入り、さらに、いわゆる文芸復興 (Renaissance) の時期にはたくさんのラテン語やギリシャ語が借用されていった。そして、こうした外来語 (フランス語、ラテン語、ギリシャ語由来の語をひとまとめにして、「ラテン系」の語彙と呼ぶことにする) は、その長さが長く、アクセントの位置も比較的后方にあるものが多かった。したがって、右側が枝分かれするほど長い語であれば、それだけ、ラテン系であると感ぜられるはずである。そして、ラテン系であれば、語の後ろの方に

(より目立つ) アクセントがあるのも自然である。

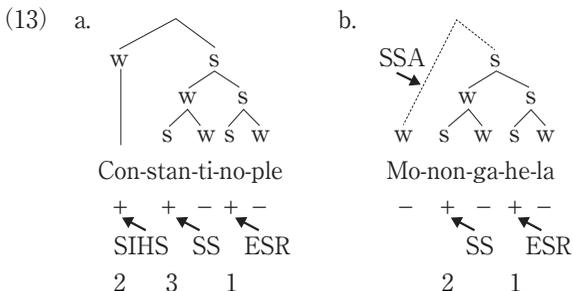
カリフォルニア州には都市名で San や Santa がつくものが多いが、それらの中でのアクセント型の微妙な違いが興味深い。例えば, *Sánta Cruz* と *Sánta Clara* という違いがある<sup>8</sup>。これらの地名は、2語から成る複合語ではあるが、もし1語のように捉えれば、Cruz は1音節で枝分かれしないが、Clara は2音節で枝分かれするから、と説明できそうである。

では、少し長めの地名の強勢の度合いの計算の実例を示しておこう。まずは、(7)でも取り上げた Apalachicola (フロリダ州にある川および町の名前) の相対的な強勢の度合いを韻律樹形図で確認してみよう。



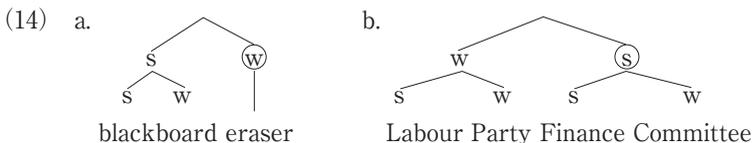
(12a)では、-co-を起点にして、SSを2回適用しているが、韻律樹形図の組み立て方として、(強勢配置を右から左へとしていくのと同様に、) フット同士を組み合わせたときに右側から組んでいっている。そして、相対的な強勢の強さは、この樹形図をトーナメント試合の勝ち抜き表のように読むことで得られる。①と線を引いた部分が1回戦、②とした部分が2回戦、③とした部分が3回戦(決勝戦)だとすると、優勝したのは-co-で、2位は決勝戦で敗れたA-で、3位は-la-となる。つまり、231型という正しい強勢型が得られる。一方、(12b)は、試しにフットよりも上位のまとまりを左側に作ってみたものであるが、これだと、321型となり、正しい結果が得られないことに注意されたい。

念のために、ESRとSSだけでなくSIHSも関与する地名の実例で、韻律樹形図から得られる相対的強さを確認してみよう。例えば、(Istanbulの旧称である)ConstantinopleとMonongahela(ウェストバージニア州北部から発する川の名前)を比べてみよう。



Constantinople では、ESR と SS だけでなく、SIHS も適用されて、合計3箇所に強勢を持つ。そして、韻律樹形図は右側から組み立てる（すなわち、-stanti- と -nople を先に組み合わせ、Con- を後回しにする）方式で、正しい強勢型が得られる。一方、Monongahela の場合には、語頭の Mo- が重音節ではないので、SIHS は適用されない。しかし、Mo- の部分も最終的には韻律樹形図に組み込まなくてはならない。この組み込みの過程は、Hayes (1982) などで遊離音節付加 (stray syllable adjunction) と呼ばれたものの一種としておく ((13b) では SSA と略記し、該当部分を破線で表した)。

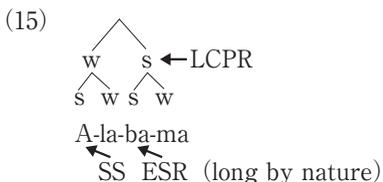
なお、複合語 (compound) も「語」の一種であるので、LCPR は適用可能である。以下の具体例 (blackboard eraser (黒板消し) と Labour Party Finance Committee ((イギリスの) 労働党財務委員会)) で確認してみよう。



blackboard, Labour Party, Finance Committee はそれぞれ複合語なので、どれも前半要素がより強くなる (s が与えられる)。その上で、音節数ではなく、(複合語を構成する) 語数で捉えると、eraser は1語であるので「右が枝分かれしない」状態であり、LCPR に従って (丸をつけた箇所が) w となる。一方、Finance Committee は2語であるので「右が枝分かれした」状態となり、LCPR により s となる。この結果、blackboard eraser では下線を引いた black が最強、Labour Party Finance Committee では下線を引いた Finance が最強、という具合に正しい結果が得られる。

#### 4. 州名のアクセント分析

それでは、アメリカの州名を具体的にアルファベット順に挙げながら、そのアクセント型を分析していこう。まずは Alabama から見ていこう。この州名には *Alabama* という強勢型が与えられるが、通常の英和辞典では、-ba- の部分には [bæ] という発音記号が示されている。つまり、A-la-ba-ma と分節した場合、後ろから2番目の音節が長いわけではないのに、そこに主強勢（第1強勢）が与えられており、いきなり例外パターンを突きつけられたような格好になる。しかしこれは、アメリカ英語の特性が反映されたものと考えられる。例えば、fast や past といった語の発音が、アメリカ英語では [fæst], [pæst] となるが、イギリス英語では [fa:st], [pa:st] となることがよく知られている。これと関連するが、Alabama の発音も、イギリス英語とアメリカ英語の両方を載せた（そして、その違いにもこだわった）辞書（例えば、*Longman Pronunciation Dictionary* 3<sup>rd</sup> ed. や『新英和大辞典第六版』など）であれば、-ba- には [ba:] も示されている。そこで本論では、Alabama の語末から2番目の音節の母音は、基底形では /ah/ という緊張母音であると仮定する（(5d)に挙げた bazaar の解説——注7——も参照）。そうすれば、以下のように、強勢の配置と度合いの計算は難しくなく、そして正しくできる。つまり、Alabama の A- が第2強勢を持ち、-ba- が第1強勢を持つ、というパターンである<sup>9</sup>。

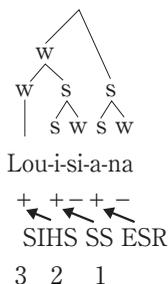


この Alabama と同じ説明が当てはまる他の州名を列挙すれば、Arizona, Colorado, Indiana, Louisiana, Massachusetts, Minnesota, Mississippi, North Carolina, Oklahoma, South Carolina がある。しかし、これらには個別性や微妙な違いもあるので、それぞれに注意すべきことをいくつか補足的に述べていこう。

Arizona と Minnesota と Oklahoma は、日本語では「アリゾナ」, 「ミネソタ」, 「オクラホマ」だが、英語では語末から2番目の母音は /ow/ であることに注意されたい。

Colorado の語末の -do には TNLV が適用される。Colorado と Indiana と Louisiana の語末から2番目の母音は、Alabama の場合と同様に、基底形では /ah/ であると仮定する。そして SS で2つ前の音節に強勢を転移させる。さらに、Louisiana の場合には語頭の Lou- にも SIHS が適用される。なお、ここで問題となるのが、韻律樹形図の組み立て順序である。Louisiana の正しい強勢型は321型であるので、(13a) で示した Constantinople とは違って、以下のように韻律樹形図を組み立てなくてはならない。

(16)



Louisiana のときだけ韻律樹形図の構築順序を変えるのはなんともアドホックであるが、「おそらくは、フランス王 Louis 14世の名にちなむこの州名が、Louis+iana という構成になっていることが影響しているのだ」というかなり苦しい説明をするしかあるまい。なお、アメリカ英語には [lu:ziænə] という具合に1音節減らした発音もあり、こちらであれば Indiana などとまったく同型とすることができるだろう。

ところで、もう一つ注意すべき点は、例えば Indiana の In- には、SS で強勢を付与することと、SIHS で強勢を付与することの両方が可能ということである。2つの規則で二重に強勢を付与する必要はないので、どちらか1つにすべきである。本論の立場は、先に適用される方を優先するというものである。つまり、ESR の次には SS を適用し、その後さらに語頭部分に重音節が残っている場合のみ、SIHS を適用すると考える。よって、Indiana (や Oklahoma, Pennsylvania など) の場合には、語頭の強勢は SS によって与えられるとする。

Massachusetts は、-chu- の部分の母音が長い (/uw/ である) ので、そこにまず強勢を与え、さらに SS で Mas- にも強勢を転移させれば、正しい強勢型が得られる。Mississippi の場合には、その綴り字通り、語末から2番

目の音節の基底形は /sip/ とする。これにより、後ろから2番目が長い音節 (long by position の解釈) となる ((5c)の vanilla の説明も参照されたい)。

North Carolina と South Carolina に含まれる Carolina のアクセント型は ESR と SS で難なく説明できるが、問題は、North や South の強勢が弱いということである。形容詞+名詞から成る複合語には、前半要素がより強く読まれるものが多い (例: bláckbird, gréénhòuse, sóftwàre, rédhèad, cóld càse)。しかしながら、アメリカの州名で North, South, West, New がつくものの場合には、おそらく、元々一つの地域だったものが分離したとか、X の出身者が「新しい X」という意味で名づけたなどの歴史があるのであろう、前半要素よりも、後半要素の方が強く読まれる。つまり、複合語的なアクセントではなく、名詞句的なアクセントを持つ。よって、North Carolina, South Carolina の場合にも Nòrth Carolína, Sòuth Carolína となる (*Longman Pronunciation Dictionary*などを参照されたい)。

アルファベット順で (Alabama の) 次は Aláska である。この語は Onset Max に従えば A-la-ska と分節できるが、-la- の部分は /læ/ でしかないのにそこに強勢が置かれるという意味で例外とせざるを得ない<sup>10</sup>。Alaska のアクセントは、おそらく、この語の元になったロシア語の *Alyaska* の発音が影響したのではないかと推測するが、はっきりしたことは残念ながらわからない。

その次の Árkansàs も困ってしまう。綴り字通りに読めば Arkánsas [ɑ:rkænzəs] と予測するし、実際、「アーカンソー川」のことであればこの発音で正しい。Arkansas という名称は、北米先住民の部族名 (スー語族 (Siouan) の Ugakhpa または Quapaw (〈下流の人々 (downstream people)〉の意) に由来し、それがフランス人探検者によって Acansa, Arkansa というふうに発音され書かれたことによるそうだが (『ランダムハウス英和大辞典 第2版』などを参照)、詳しい経緯・事情はわからない。

California に関しては、すでに (7) で述べたように、ESR によって語末から3番目の音節の -for に強勢が与えられ、さらに SS で Ca- にも強勢が与えられた上で、LCPR によって、-for- がより強い強勢を持つ。まったく同じパターンが Pennsylvania にも見られる。

次の Connécticut は、後ろから数えて2番目の音節 -ti- が短いので、もう1つ前 (すなわち後ろから3番目) の音節 -nec- に強勢が与えられる。強勢が与えられるのは1箇所だけなので、相対的な強さを決める必要はない。同じことが Florida, Georgia, Idaho, Iowa, Maryland, Michigan, New Mexico,

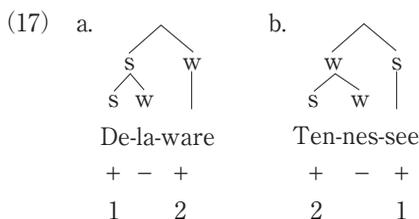
Oregon, Virginia, West Virginia, Washington, D.C./District of Columbia に当てはまる。Idaho は辞書で *Ídahò* と示されることが多いが、この語の語末には35節で触れた TNLV が適用された結果、強勢を持つように見えるだけだと解釈したい（つまり、あくまで *Ídahò* であると捉える）。New Mexico は句的な強勢配置がなされる点に注意すべきだが、Mexico 単独の強勢型は Idaho などと同じである。Maryland の名称は英国王 Charles 1世の妃 *Henrietta Maria* にちなみ、一種の複合語と見なすことも可能であるが、ここでは、単純語として扱い計算することにする。Virginia の語頭の *Vir-* は一見したところ重音節のように見えるので、SIHS の適用の可能性が問題になりそうである。しかし、*-ir-*, *-er-*, *-ur-* という綴りの発音では、母音と /r/ が一体化した状態になるので、重音節と見なす必要はないであろう（したがって、*-gi-* に強勢を与えるだけでよい）。West Virginia は句的な強勢配置になる。

さて、Connecticut や Florida など「-3型」と呼ぶことにすると、この「-3型」の仲間に入るように見えるが、説明に窮するのが Washington である。Wa-shing-ton と分節できるので、後ろから2番目の音節が長くなり、予測としては *Washing-ton* となる（つまり、日本語の「ワシントン」と同じようになるはずである）。しかし、実際には *Washington* である。これはなぜであろうか。Washington の語源を調べると、中英語 (ME) の *Wassynghona* に由来し、原義は ‘the farm of the people of *Wassa* (人名)’ である（つまり、「*Wassa* の家族所有の農地」の意味である）。もう少し補足すれば、Washington の *-ing* は「…に属する」というような意味を表す名詞を造る接尾辞であり、*-ton* は古英語 (OE) の *tūn* ‘enclosure, town’ に由来し、地名・姓につける連結形である。よって、Washington は接辞的な要素が二重についた派生語（もしくは、*Wassa’s town* のような一種の複合語）であるので、接辞部分ではなく、語幹の *Wash-* の部分に強勢が与えられたと分析できよう。だいぶ苦しい説明になってしまったが、これ以上にエレガントな解決策は思いつかない。

ついでながら、アメリカの首都の Washington D.C. の（Washington の強勢型についてはすでに述べたので、）District of Columbia の部分を取り上げると、Columbia の強勢型は、Georgia や Virginia などと同様に、語末から3番目に与えられるとすればよい。District は（語末音節の母音が長くないので、）第1音節に強勢が置かれる。

次の Delaware は、語末部分に二重母音を含むのでまずそこに強勢を

置き、さらに2つ前の De- にも強勢を転移させる。その上で LCPR を適用すると、右側は枝分かれしないので、De- が第1強勢、-ware が第2強勢を持つことになる。この Delaware のように語末部分に強勢を持つ語を「-1型」と呼ぶことにすると、同じように「-1型」に属する州名として Illinois, Tennessee, Utah, Vermont を挙げることができる。しかしながら、Delaware と Illinois, Tennessee の間には大きな違いがある。それは、Illinois と Tennessee は(10)の LCPR に従っていないということである。つまり、右側が枝分かれしないのにそちらが強いという例外的なパターンを示す。Delaware と Tennessee の韻律樹形図でこの違いを示せば、以下のようになる。



Lieberman and Prince (1977) は、右側が枝分かれしていないのにそこが強くなるものには[+F]という例外指定をしている。この[+F]というのは、おそらく、foreign accent を意識したネーミングであろう。Lieberman and Prince は[+F]を持つ実例として Tennessee を挙げているが、Illinois には触れていない。が、Illinois も、-nois の部分の綴りと最後の子音の s を発音しない点がまさにフランス語風であるので、[+F]と指定してよからう。

Utah の場合には、語末部分の母音[a:]が基底形で /ah/ とできるので、long by nature によりそこに強勢が与えられる。そして、語頭の U- は SIHS で強勢を持ち、LCPR で前側がより強いパターンとなる、と説明できる。しかし、Vermont は例外とするしかない。Vermont を英語として発音すれば、第1音節に強勢を置くことが予測される。しかし実際には語末強勢である。おそらくこれはフランス語の影響と思われる。なぜなら、Vermont という州名は *vert* 'green' + *mont* 'mountain' というフランス語（すなわち「緑の山」の意）に由来するからである。

さらに次は Hawaii であるが、この語は Ha-wai-i と分節でき、後ろから2番目の母音が長いので (long by nature), そこに強勢が与えられる。強勢

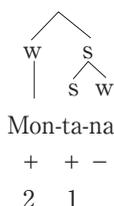
はこの1箇所であるので、相対的な強勢の強さを求める必要はない。しかし、語末の-iにはTNLVが適用され、結果として、そこも[i:]と長く発音される。このHawaiiのように後ろから2番目の音節1箇所に強勢を持つだけのグループ（「-2型」だけで、前方への強勢の転移等がないもの）としては、Kansas, Kentucky, Missouri, Nebraska, Nevada, New Hampshire, New Jersey, North Dakota, Rhode Island, South Dakota, Texas, Wisconsinがある。

念のためにそれぞれについて確認しておこう。Kansasは2音節語なので（語末に緊張母音がない限りは）第1音節に強勢を与えるしかないと説明できる。Kentuckyでは-ck-という綴りが重要で、このcとkという文字は共に/k/と読めるので、いわば重子音状態になっている。よって、Kentuckyと分節したときに、後ろから2番目の音節の基底形は重音節となる（long by positionの状態である）ので、そこに強勢が与えられる<sup>11</sup>。Missouriの第2音節は、二重母音の一種——tour, poor, cureなどと同じ母音——を含むので重音節となり、そこに強勢が与えられる。NebraskaはNe-bra-skaと分節されるが、-bra-の母音は緊張母音ではないので、なぜそこに強勢が与えられるのかは不明である。この語の語源を調べると、北米先住民語（Oto Indian語）の*ni-brath-ka*（「浅い川」を意味する）に由来するとのことである。この*Nibrathka*に基づけば、第2音節に強勢を与えることはそれほど不思議ではなくなる。Nevadaでは、-va-の母音の基底形を/ah/とすればよい。New HampshireのHampshireでは、-shireの部分の母音が緊張母音ではないので、第1音節のHam-に強勢が与えられる。New JerseyのJerseyも、（綴りからすると語末の母音が緊張母音になる可能性もありそうではあるが、）語末の母音を非緊張母音と捉えれば、第1音節に強勢が与えられる。この2つのNewのついた州名は後ろの語の方がより強い句的な強勢型となる。North DakotaのDakotaは後ろから2番目の音節の母音が/ow/なので、そこに強勢が与えられる（long by natureの状態）。ただし、この州名は句的な強勢型となり、それはSouth Dakotaにも当てはまる。Rhode IslandのIslandは2音節語で（語末の音節には緊張母音がないので、）第1音節に強勢が与えられることは自然である。ところで、この地名は一種の複合語であるから、Rhóde Íslandとなってよいはずだし、実際に、イギリス英語ではそのパターンになる。ところが、アメリカ英語ではRhóde Íslandと句の強勢パターンになるのが不思議である（しかし、なぜそうなったのかの説明は私にはできない）。Texasは2音節語で語末の母音が緊張母音ではないので、

語頭に強勢を持つ。Wisconsin は Wi-scon-sin と分節できるので、(long by position によって) 後ろから2番目の音節に強勢が与えられる。

Montana は、後ろから2番目の母音を (Alabama などと同様に) /ah/ とすれば、その音節に強勢が与えられる。この点は上述の-2型の例と同じである。が、Montana は (3.4節で既述のように) SIHS によって語頭音節にも強勢が与えられ、この点が Hawaii などと異なる。そして以下に示したように、LCPR によって、語頭音節よりも第2音節の方がより強い強勢を持つことになる。

(18)



Montana と同じことが Ohio, Wyoming にも当てはまる。なお、Ohio は語末の母音に TNLV が適用されるので、結果として、すべての音節に強勢があるかのように聞こえる語となる。

最後に残ったのが Maine と New York だが、Maine も York も 1 音節語なので、強勢の位置に迷うことも説明する必要もあるまい。New York が句的パターンになるのは、他の New がつく州名と同じである。

## 5. まとめに代えて

本論のまとめに代えて、50(+1)の州名にどのような規則等が関与しているのかを(略号を用いながら)一覧表にして示すことにする。「-1型、-2型、-3型」は、ESR によって後ろから何番目の音節にアクセントが与えられるかを表している。

|            |                                 |
|------------|---------------------------------|
| Àlabáma    | -2型 (long by nature) +SS & LCPR |
| Aláaska    | 例外 (ロシア語の影響か?)                  |
| Àrizóna    | -2型 (long by nature) +SS & LCPR |
| Árkansàs   | 例外 (北米先住民がつけた地名のフランス語読みが影響か?)   |
| Càlifornía | -3型 +SS & LCPR                  |

アメリカ合衆国の州名のアクセント型に関する一考察

|                |  |
|----------------|--|
| Còlorádo       | -2型 (long by nature) + SS & LCPR (+ TNLV)        |
| Connécticut    | -3型  |
| Délawàre       | -1型 + SS & LCPR                                  |
| Flórida        | -3型  |
| Géorgia        | -3型  |
| Hawáii         | -2型 (long by nature) (+ TNLV)                    |
| Ídaho          | -3型 (+ TNLV)                                     |
| Ìllinóis       | -1型 + SS & LCPR [+F]                             |
| Ìndiána        | -2型 (long by nature) + SS & LCPR                 |
| Íowa           | -3型  |
| Kánsas         | -2型  |
| Kentúcky       | -2型 (long by position) (+TNLV) (SIHS が適用される場合あり) |
| Lòuisiána      | -2型 + SS + SIHS & LCPR (韻律樹形図の組み立て方は特殊)          |
| Máine          | 1音節語なので特に計算の必要なし                                 |
| Máryland       | -3型  |
| Mássachúsetts  | -2型 (long by nature) + SS & LCPR                 |
| Míchigan       | -3型  |
| Mínnesóta      | -2型 (long by nature) + SS & LCPR                 |
| Mississíppi    | -2型 (long by position) + SS & LCPR (+ TNLV)      |
| Missóuri       | -2型 (long by nature) (+ TNLV)                    |
| Mòntána        | -2型 (long by nature) + SIHS & LCPR               |
| Nebráska       | 例外 (北米先住民語の影響か?)                                 |
| Neváda         | -2型 (long by nature)                             |
| Nèw Hámshire   | -2型 (句的アクセントパターン)                                |
| Nèw Jérsey     | -2型 (+ TNLV) (句的アクセントパターン)                       |
| Nèw México     | -3型 (+ TNLV) (句的アクセントパターン)                       |
| Nèw Yórk       | 1音節語なので計算の必要なし (句的アクセントパターン)                     |
| Nòrth Càrolína | -2型 (long by nature) + SS (句的アクセントパターン)          |
| Nòrth Dakóta   | -2型 (long by nature) (句的アクセントパターン)               |
| Òhío           | -2型 (long by nature) + SIHS & LCPR (+ TNLV)      |
| Òklahóma       | -2型 (long by nature) + SS & LCPR                 |
| Óregon         | -3型  |
| Pènnsylvania   | -3型 + SS & LCPR                                  |
| Rhòde Ísland   | -2型 (句的アクセントパターンになる理由は不明)                        |
| Sòuth Càrolína | North Carolina と同様                               |
| Sòuth Dakóta   | North Dakota と同様                                 |

|                      |                                    |
|----------------------|------------------------------------|
| Tennessee            | -1型 + SS & LCPR [+F]               |
| Texas                | -2型                                |
| Utah                 | -1型 + SIHS & LCPR                  |
| Vermont              | 例外 (フランス語の影響だろう)                   |
| Virginia             | -3型                                |
| Washington           | 例外 (二重に接辞・連結形が付加されているからか?)         |
| West Virginia        | Virginiaと同様 (句的アクセントパターン)          |
| Wisconsin            | -2型 (long by position)             |
| Wyoming              | -2型 (long by nature) + SIHS & LCPR |
| District of Columbia | -3型 (Districtは-2型)                 |

## 注

\*長年、「英語学演習 (形態・音韻論)」の授業において、日英語のアクセントに関する論文を受講生たちに読ませた後に、「どの理論に基づいても構わないので、自分が好きな理論を用いて、アメリカの50州と日本の47都道府県の地名のアクセント型について述べなさい」というレポート課題を課してきた。学生たちに、暗記していなくても自分でアクセント型を予測・説明できる経験をしてもらいたいというのが、このレポート課題の狙いであった。レポートの手本と言ってはややおこがましいが、太田 (2010) で、日本の都道府県名のアクセント型についてはかなり詳しく論じた。しかし、アメリカの州名のアクセント型に関してはまとまった形で発表をしてこなかったので、ここで自分なりの分析・説明を披露しておかなくてはなるまい、と思った次第である。

1. 英語のアクセントを論じるときには、「アクセント (型)」という用語よりも「強勢 (型)」という用語の方がふさわしい場合がある。しかし、「アクセント」は上位語・包摂語で、「強勢」の意味も含むので、本論では、「アクセント (型)」と「強勢 (型)」を同義として使い、特に区別することはしない (ただし、英語固有のことを議論するときには「強勢 (型)」という用語の使用が比較的多くなった)。
2. なお、母音には単母音 (monophthong) ——短母音 (short vowel) と長母音 (long vowel) が含まれる——と二重母音 (diphthong) がある。
3. ラテン語では、二重子音 (doubled consonants) は2つとも発音される。例えば、Griffin (1991: 92) に “// as in English ‘hall-light’ (NOT as in ‘taller’) . . . pp as in English ‘hip-pocket’ (NOT as in ‘happy’) とある。

- ついでながら、x という字母は、/ks/ と読まれるので複子音 (=2つの子音から成る) と捉えなくてはならない。
4. 母音が長母音か二重母音 (これらは現代英語では緊張母音 (tense vowel) と分類される) である音節か、短母音 (現代英語では弛緩母音 (lax vowel) と分類される) の後に2つ以上の子音が続く音節と聞けば、Chomsky and Halle (1968) で導入された「強結合 (strong cluster)」という単位が想起されるのではなかろうか。Chomsky と Halle も、もちろん、ラテン語のことを参考にしたに違いない。
  5. Boston の /s/ は両音節的 (ambisyllabic) である、つまり、前後両方の音節に属するという分析もある。しかし、ここでは、そうした二重性が生じるのはあくまで表面的な音声レベルでのことであって、基底的 (underlying) な音韻レベルでは子音はどちらかの音節に属する、という立場で議論する。
  6. 例えば、America という語を辞書で見れば、A-mer-i-ca と分節されている。これは、例えば me /mi:/ と met /met/ の対比からもわかるように、いわゆる開音節 (open syllable) であれば母音はアルファベット音で読まれ、閉音節 (closed syllable) であれば母音は基本音で読まれる、という分類基準が反映された記述である (A-me-ri-ca と分節しては、/əmi:ri:kə/ と読まれかねないからであろう)。しかしながら、ネイティブスピーカーの直観では、辞書の記述とは異なる結果が現れる。Fallows (1981) は、英語の分節点を明確にするために、問題となる音節を2回繰り返す手法 (例えば、shampoo → shamshampoo/shampooopoo) を提唱している。このアイディアに従って、「America の第2音節を2回繰り返してください」と求めたところ、ニュージーランド人の友人である Wayne Lawrence 氏 (オークランド大学) から、アメリカ人で山口大学の同僚の Ariel Sorensen 氏からも、A-me-me-ri-ca という回答を得た (つまり、nonrhotic な方言か rhotic な方言かといった違いに関係なく、同じ答えが得られた)。よって、本論では A-me-ri-ca と分節して議論することにする。ちなみに、Simon & Garfunkel の “America” という曲でも、Ame-rica と分節して歌われていると私には聞こえる (YouTube の動画でもそう見える)。
  7. [ɑ:] は、例えば Chicágo という地名のアクセントからもわかるように、長い母音・緊張した母音と扱ってよい (Chomsky and Halle (1968) において、/ā/ が [+tense] とされていることも参照されたい)。しかし、

第2要素を /y/ や /w/ では表せないので、ここでは /h/ を第2要素として仮定して使用した（また、第1要素も /ɑ/ ではなく /a/ を用いることにする）。

8. 私には Santa Cruz に住んで Santa Clara で働いている医師の Bob Pollard という友人がいるが、彼に確認したところ、Santa Cruz では Santa の方がより強くて、Santa Clara では Clara の方がより強いとのことだった。また、例えば、『新英和大辞典 第六版』（研究社）でも、（Santa Clara では Clara がより強くて、）Santa Cruz は、現地のアクセントでは Santa がより強くなると紹介されている。
9. Chomsky and Halle (1968) では、（複合語ではなく）単一の語においては、2番目に強い強勢には [3 stress], 3番目に強い強勢には [4 stress] という数字・数値が付与されている。しかし本論では、より単純に、2番目に強い強勢を「第2強勢」、3番目に強い強勢を「第3強勢」と呼ぶことにする。
10. 例えば、Onset Max を無視して A-las-ka と分節するとか、あるいは、Chomsky and Halle (1968) 流に（「音節」ではなく）結合 (cluster) という単位で捉え、-ask- の部分が強結合の一つになっているとすれば、第2音節に強勢を与えることは可能である。しかし、そのような一貫性のない姑息なことをしても意味がない。ここでは、Alaska は語末から2番目が短いのにそこに強勢を持つ語として扱うことにする。
11. なお、Kentucky の第1音節の Ken- は、アメリカ英語では母音が曖昧母音に弱化した発音が優勢であるが、イギリス英語では副次強勢が与えられる（すなわち、母音が [a] でなく [e] となる）。後者の場合には、SIHS が働いているとすればよい。

### 参考文献

- Chomsky, Noam and Morris Halle (1968). *The Sound Pattern of English*. New York: Harper & Row.
- Fallows, Deborah. (1981). "Experimental Evidence for English Syllabification and Syllable Structure". *Journal of Linguistics* 17, 309-317.
- Griffin, Robin M. (1991). *Cambridge Latin Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Halle, Morris and Jean-Roger Vergnaud (1987). *An Essay on Stress*. Cambridge, MA: MIT Press.

- Hayes, Bruce (1982). "Extrametricity and English Stress". *Linguistic Inquiry* 13, 227-276.
- Hooper, Joan B. (1976). *An Introduction to Natural Generative Phonology*. New York: Academic Press.
- Jespersen, Otto (1904). *Lehrbuch der Phonetik*. (Trans. Hermann Davidsen.) Leipzig: Druck und Verlag von B. G. Teubner.
- Kahn, Daniel (1976). *Syllable-based Generalizations in English Phonology*. Ph. D. dissertation, MIT.
- 川越いつえ (2007). 『英語の音声を科学する 新装版』 東京：大修館書店。
- Kubozono, Haruo (1996). "Syllable and Accent in Japanese: Evidence from Loanword Accentuation". 『音声学会会報』 211, 71-82.
- Kubozono, Haruo (2008). "Japanese Accent". *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, ed. by Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito, 165-191. Oxford: Oxford University Press.
- 窪菌晴夫・太田聡 (1998). 『音韻構造とアクセント』 東京：研究社。
- 呉茂一 (1952). 『ラテン語入門』 東京：岩波書店。
- Liberman, Mark and Alan Prince (1977). "On Stress and Linguistic Rhythm". *Linguistic Inquiry* 8, 249-336.
- 松平千秋・国原吉之助 (2000). 『新ラテン文法 第7版』 東京：東洋出版。
- Ohta, Satoshi (1986). "Word Stress and Syllable Structure in English". *Tsukuba English Studies* 5, 167-183.
- Ohta, Satoshi (1993). "A Syllable-Based Arboreal Theory of Stress and Destressing in English Words, Part 1." 『英語と英米文学』 28, 1-41.
- 太田聡 (2010). 「日本の地名のアクセント型とラテン語アクセント規則との不思議な関係について」 『異文化研究』 4, 1-14.
- Selkirk, Elisabeth (1982). "The Syllable", *The Structure of Phonological Representations Part II*, ed. by Harry van der Hulst and Norval Smith, 337-383. Dordrecht: Foris.
- Selkirk, Elisabeth (1984). "On the Major Class Features and Syllable Theory" *Language Sound Structure*, ed. by Mark Aronoff and Richard T. Oehrle, 107-136. Cambridge, MA: MIT Press.
- Trager, George L. and Henry Lee Smith (1951). *An Outline of English Structure*. Norman, OK: Battenburg Press.
- Vihman, Marilyn (1996). *Phonological Development: The Origins of*

*Language in the Child*. Cambridge, MA: Blackwell.

**辞書類**

Kenyon, John Samuel and Thomas Albert Knott (1953). *A Pronouncing Dictionary of American English*. Springfield, MA: Merriam.

國廣哲彌ほか編 (1994).『ランダムハウス英和大辞典 第2版』東京：小学館.

*Longman Dictionary of Contemporary English*, 6<sup>th</sup> ed. (2014). Harlow, Essex: Pearson Education.

水谷智洋編 (2009).『羅和辞典 改訂版』東京：研究社.

竹林滋編集代表 (2002).『新英和大辞典 第六版』東京：研究社.

Wells, John C. (2008). *Longman Pronunciation Dictionary*, 3<sup>rd</sup> ed. Harlow, Essex: Pearson Education.